



教祖御理、解孝八節  
子供の中に質の子が  
あれば、それが可愛いか  
親の心方や、無信若程  
神は可愛い、信心して  
おかげを受けてくれよ。  
この御教訓でこの物語  
の命であります。

大正 13 年制作 無声映画

せいぜん

# 性は善

この映画は、大正13年（1924年）に、元帝国キネマ撮影所長であり、金光教の信奉者である川口吉太郎氏<sup>かわぐちきちたろう</sup>によって作られた。川口氏は、「神様のおかげを受けたお礼にお役に立ちたい」との一心から、実際に聞いたおかげ話をもとにした。映画の出演者は、プロの俳優ではなくすべて金光教の信者であった。

この『性は善』のフィルムは、平成30年（2018年）に金光図書館で発見され、現在見つかっているのは、全5巻の内、1、2、5巻の3本である。脚本はなかったため、当時の金光教の新聞に掲載されたあらすじを元に、助言を頂きながら、脚本を作った。

大正時代、映画は活動写真と呼ばれ、庶民の娯楽の一つだった。当時の映画は音のついていない「無声映画」で、「活動弁士」と「楽隊」が映像に合わせて語り奏することで初めて作品として完成する、ライブ感のある芸術だった。

大正時代の映像、現在の活動弁士の語りと音楽、そして、皆さま観客で作り上げる時間を、どうぞお楽しみください。

# 第1幕 大阪から金光へ列車は西へと進む



大阪駅に汽車が到着する。

西へ向かう列車は、金光教本部への参拝者など、多くの乗客を乗せて進む。

大阪堂島で米問屋を営んでいる金光教信者の谷口進、信子夫妻は、大正6年（1917年）の米騒動時に難を逃れ、そのお礼参拝に金光へ向かっているところである。そして、隣の車両から入ってきた老夫妻に席を譲った。



谷口進・信子夫妻

## 大阪駅

映画に映っているのは、明治34年（1901年）に建てられた二代目である。大理石や檜を使用した本舎2階の吹き抜けがあるゴシック造りで、当時は大阪三大名所の一つとして大変な人気を博した。映画では、24時間運行していた路面電車の大阪市電、車、人力車、荷車も映っている。

しんどいときはお互い様。助け合うたらいいんです。

見ず知らずの人にこんなに親切にしてもらうって。



およし 鈴木

また、別の車両ではスリを生業とする元芸妓のおよしが目を光らせ、仕事を探していた。

そのとき、洋装店番頭の鈴木が車両に入ってくる。鈴木は、大金を抱え、金光へ、カンカン帽の材料である麦稈真田を買い付けに行くところであった。およしは、鈴木を誘い隣に座らせる。鈴木の懐にある大金を狙っていた。

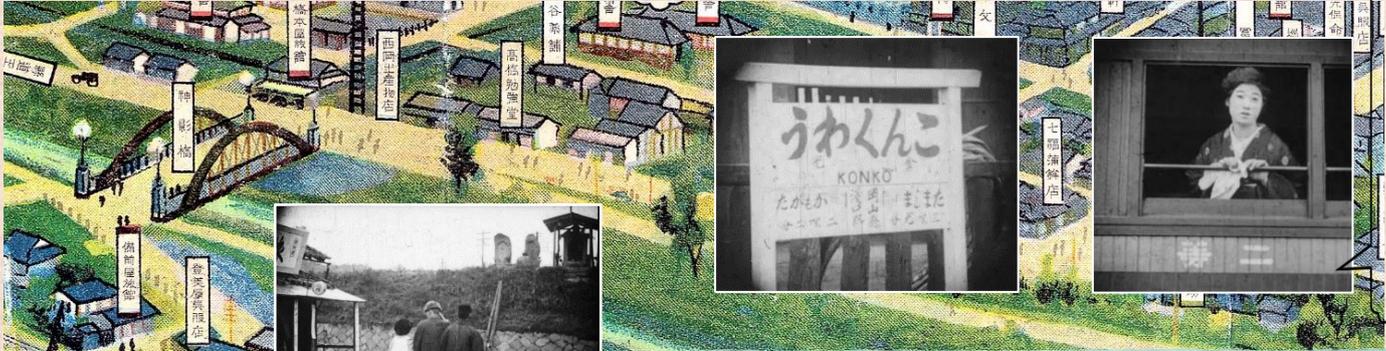
## ばっかんさなだ 麦稈真田

「麦稈」は麦わら、「真田」は組紐の一種。主にカンカン帽などに使用された。

明治末から昭和35年頃まで、県南部の代表的な産業となり、岡山県は全国の生産量の7割から8割を占めていた。讃岐・伊予方面から「組子」と称して婦女子を雇い入れ、自家労力に加えて小規模な家内生産をする家も現れた。明治36年には、「岡山県真田同業組合」の事務所が金光町大谷に移転し、同組合の中心地となった。

# 第2幕 金光へ着いた人々

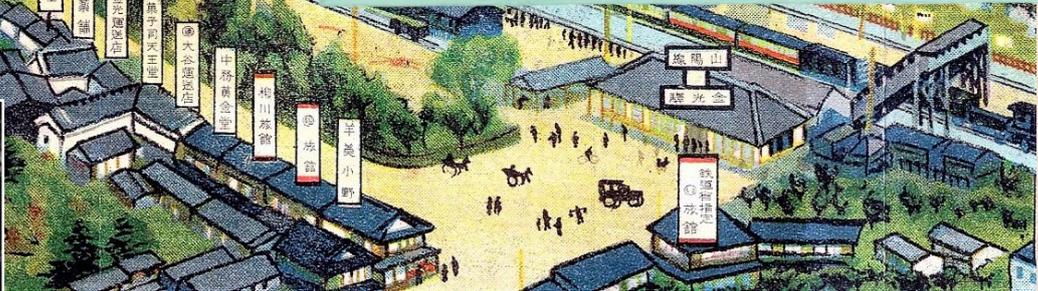
善悪一切をのせた列車は斯く金光駅へ着く。  
 およしは眠り込んだ鈴木を車内に置いて、金光でもう一仕事しようと汽車を降りる。  
 そして、遅れて目を覚ました鈴木も、お金を盗まれたとは気づかずに金光で下車するのであった。



もう一仕事ありそうだな。

## 金光駅からの町並み

当時、金光駅から神影橋への道筋には、薬局、運送会社、銀行、貸本屋などの町民のための店舗だけでなく、参拝者を相手とした旅館や飲食店・お土産屋などの店も連なっていた。3人が立ち寄る「天王堂」は、菓子店。店先には、煎餅、饅頭など並んでいた。 『大谷乃沿革』、『金光町史 本編』より



図：『金光町鳥瞰図』より（大正12年1月）発行：岡本神器店



無理せんといっておくんははれ。

これはわしの「おかげ」や。

番頭 老商人 孫娘

同じ頃、大阪船場で呉服商をしている老商人とその孫娘、その店の番頭の三人も、金光教本部へ参拝に行くため、金光駅で下りた。  
 その道中、孫娘は駅前の天王堂でお菓子を買ってもらう。  
 その後、一行は、里見川沿いの上り坂で、荷車を引っ張り、困っている老人と遭遇する。それを見た老商人は、羽織を脱いで荷車を後ろから押す。老店主に力仕事はさせられないと番頭は代ろうとするが、老店主は聞き入れなかった。



番頭 孫娘 老商人

### み かげはし 神影橋

「神影橋」といつ命名されたのかは分らないが、明治26年(1893年)この橋の第一世が架設された。その時から橋の名は神影橋だった。この映画に映し出される神影橋は、第三世で、大正10年(1921年)2月19日渡初式が行われた。大正文化を取り入れ、四基のシャンデリアが舗装され、橋上を光で照らした。現在の神影橋は第四世で、昭和53年(1978年)に完成した。

『神影橋—その風土記』(山県二雄・著)より



坂を上がりきり、荷車の老人はお礼も言わず去って行った。そのことに憤慨する番頭。しかし、老商人はそれをなだめた。

そして、一行は金光教大教会所へ続く神影橋を渡って行く。老商人は言う。

「これが金光様へお参りなさる人がおかげを頂く神影橋じゃ。お国参りに来る人はみんなここから金光様を拝んで、一步一步、大教会所のお広前に近づいていくんや。ご霊地のお徳のしみ込んだ、ありがたいおかげの橋や。わしらも金光様を拝んで、渡らせてもらお。」

遠くの金光教大教会所の屋根を見ながら、神影橋を渡っていると、孫娘は若い女性が大きな荷物を抱えて通っているのに気づいた。そばに駆け寄り、最初は断られながらも、荷物を運ぶのを手伝おうとする。

それを見たおよしは、「この薄情な世の中に何という美しい人だろう」と、自分の行いを悔いていく。そして、田舎に残した両親のことを思い出すのであった。



およし

かめへん。半分持ったるわ。



それに比べて私は……



## 第3幕 およしの過去

およしの両親は、奈良の古びた農家に暮らしていた。  
病床の母と看病する父の2人が、およしのことを話している。



およしの両親

およしは家計のために10歳で大阪に売られ、置屋で下働きをしながら15歳で曾根崎新地の芸妓となった。しかし、明治42年に起きた「北の大火」で焼け出され、着の身着のままで逃げ出した。店の女将が金光教の熱心な信者で、梅田の教会で他の芸子たちと寝泊まりさせてもらっていた。そこへおよしを水揚げしてくれた旦那が迎えに来て、皆に礼を言いおよしは出て行った。

およしが幸せになれると女将さんも梅田教会の先生も喜んでしたが、その相場師の旦那が株で大負けして自殺してしまった。それからおよしの行方は誰も知らないが、お金は変わらず両親に送ってくる。どこで何をしているのかと両親はおよしのことを心配している。

およしは老父母のことを考えながら、自らを省みて、鈴木に会ってさっき奪ったお金を返そうと決心をするのであった。

### 北の大火

明治42年(1909年)7月31日から8月1日にかけて大阪市内で起こった明治期最大の火災で「天満焼け」の別称。一夜にして、1万千余戸が焼け、罹災者は1万3千人以上だった。

金光教梅田教会などは、曾根崎新地の花街で働く女性達を避難させ救援活動を行った。

『大教新報』(金光教の明治期の新聞)の第176号(明治42年8月6日)には、「(略)かの同情すべき人身売買の犠牲となれる特殊廓内に生活せる曾根崎方面の所謂北陽新地の女性どもである。(略)これら女性ほど教育においても健康においても心性においても不幸なものはないのである。此等を救済し救護して良く避難せしめたのは主として大阪における各所の金光教会であった」と書いている。



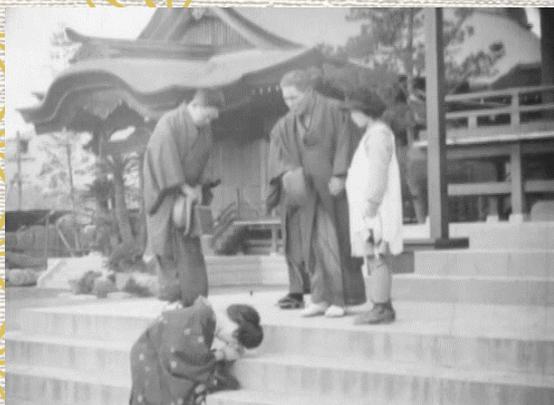
## 第4幕 およしの改心とおかげの道

およしにお金を盗まれた鈴木は、しばらくしてお金がないことに気づき、主人への申し訳のため死を覚悟し、走り来る列車に飛び込もうとしていた。それに気づいたおよしは、無我夢中で鈴木にすがりつき、二人で線路わきに倒れ込む。鈴木は酔っ払ってお金を盗られたことを悔いつつ、およしがなぜ自分を助けたのか問う。老商人達が人を助ける姿を見て、お金を盗ったことを悔いて謝るおよし。鈴木はそれを聞き、今起こっている事柄は、金光様のお計らいかもしれないと気づき、今日あったことのお詫びと、命を助けられたことのお礼をしたいと思う。これも何かの縁と、およしを誘い、2人は金光教大教会所へ向かうのであった。



およしは、鈴木に誘われるまま、金光教大教会所へ行く。そこへ、先ほどの老商人一行がやってきた。玄関の前にうずくまり、泣いているおよしに孫娘が声をかける。

およしは老商人たちに自分の正体と今日の出来事を告白する。



### だいきょうかいしよ 金光教大教会所



左から祖霊殿、本殿、神饌殿  
大正12年(1923年)頃

明治43年(1910年)8月大教会所造営発表式が行われ、大正2年(1913年)2月に起工式を行う。本殿は同9年(1920年)5月に竣工。その後、附属神舎も建てられ、同10年2月、金光教大教会所新築落成祝祭を執行した。

そのときに出版された『大教会所新築概要』には、「凡て神への報恩なれば一糸半銭の奉財も、その取扱に於て、聊かも異なる処あらず、従って、予算なく、工程なきと共に、立札なく、表彰なく、唯神心至誠の交通あるのみ。建築を進むる事、其事が信心其のものにして、信者は之によりて、信人愈々進むべきなり。(原文ママ)」とあり、金光教教師、信者が一丸となり奉仕し、念願の落成であったことがわかる。

しかし、大正14年(1925年)4月14日夜、大教会所と附属神舎は火災により焼失。映画にある大教会所は、当時の様子がわかる貴重なシーンである。

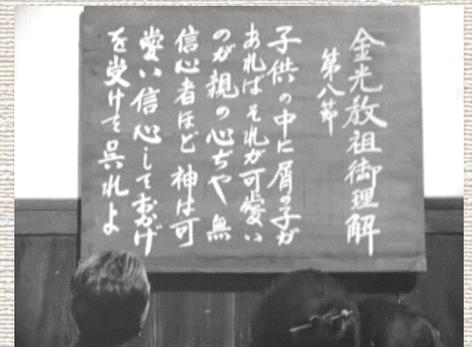
およしは自首をしてこれまでの罪を償うことを決める。およしの心には、刑務所で罪を償っている自分と、畑で働く両親の姿が浮かんでいた。両親のことを心配するおよしに対して、老商人がおよしの身元保証人となり、奈良の両親の面倒を見ることを申し出るのであった。



そして、月日は流れて、刑期を終えたおよしは奈良の実家で両親と再会する。刑期中、老商人は両親の面倒も見てくれた。老商人は金光教梅田教会のご信者であった。ここは「北の大火」時に焼け出されたおよしたちを受け入れ、助けてくれた教会である。およしと両親の暮らす家には新しい神棚が設えられた。



金光教梅田教会（大阪府）



およしと両親は金光教梅田教会にお礼に参る。教会の玄関にはみ教えが書かれていた。

#### 「金光教祖御理解 第八節」

子供の中に屑くずの子があればそれが可愛いのが親の心じゃ  
無ぶしんじんもの信心者ほど神は可愛い 信心しておかげを受けてくれよ」

そのみ教えを見て深く肯くおよしと両親。その掲示板には、世間の荒波にもまれ、傷つきながら生きてきた3人を温かく迎え入れようとしている神様の心が示されていた。

3人は神様にお礼を申し上げるのだった。



「性は善」終



かわぐち きちたろう  
監督 川口 吉太郎



大正6年(1917)に『毒草』を天然色活動写真株式会社(大阪)で監督。『毒草』は菊地幽芳作の大阪毎日新聞に連載された人気小説で、同年に日活、小林商会の三社によって競作された。

帝国キネマ演芸株式会社(大阪)に創業時の大正9年5月から大正10年1月まで所属。撮影所長をつとめ、「川口呑舟」という別名で、脚本や監督もつとめた。

それ以降は、松竹キネマ蒲田撮影所(東京)に移り、『神徳太郎』(1921)『花井お梅』(1922)などを監督。現在のところ、それ以後の川口氏の経歴は不明である。

『性は善』は、『花井お梅』から2年後に制作されている。

## 活弁とは？

日本では、無声映画の上映の際、活動弁士(以下活弁士)が映画説明や台詞を付けており、そこに楽士による音楽を付けたものを「活動大写真」と呼んでいました。

活弁士は舞台上でななめに構え、奥のスクリーンと観客席を交互に見ながら語っていたので、当時の映画館には必ず舞台がありました。俳優の声や音楽が吹き込まれた映画が登場するまでは、このようなスタイルで映画を見せていました。

現在、わずかな活弁士たちが、演じ続けています。



### みょうと 夫婦活弁士 むっちゃん・かっちゃん

～矢吹勝利・むつみ夫妻より～

2007年の岡山映画祭で尾上松之助の「豪傑地雷也」を上映することが決まり、上映には活弁士が必要との条件付きでした。上映に当たって、にわか仕込みの活弁士となったのが私たち夫婦でした。

マスコミに取材を受けた際、今後も活動を続けていくと宣言したため、引くに引かれなくなり、今も夫婦(みょうと)活弁士「むっちゃん・かっちゃん」として活動を続けています。



### 楽士 野原 直子

ヤマハエレクトーン講師、リトミック・ピアノ講師として音楽教育に携わる。また、ルネッサンスやバロック音楽に興味を持ち、リコーダーコンソートや古楽アンサンブルの活動や、フィガーノート普及会「HappyMuse」のスタッフとして、フィガーノート(フィンランド生まれのユニバーサルデザイン楽譜)の国内普及活動も行っている。

2007年～2014年に倉敷市児島で、「佐々木亜希子の活弁シネマライブ」にて、楽士として、佐々木亜希子氏、むっちゃんかっちゃんと共に共演。その後、佐々木亜希子氏とは「シネマート新宿」などにおいて10回ほど共演した。

〈主催〉 大谷 archive

〈助成〉  公益財団法人  
福武教育文化振興財団

 beyond2020プログラム

〈編集・発行〉 金光図書館 令和2年10月発行

岡山県浅口市金光町大谷 320 TEL : 0865-42-2054

URL : <http://www.konkokyo.or.jp/konko-library/>